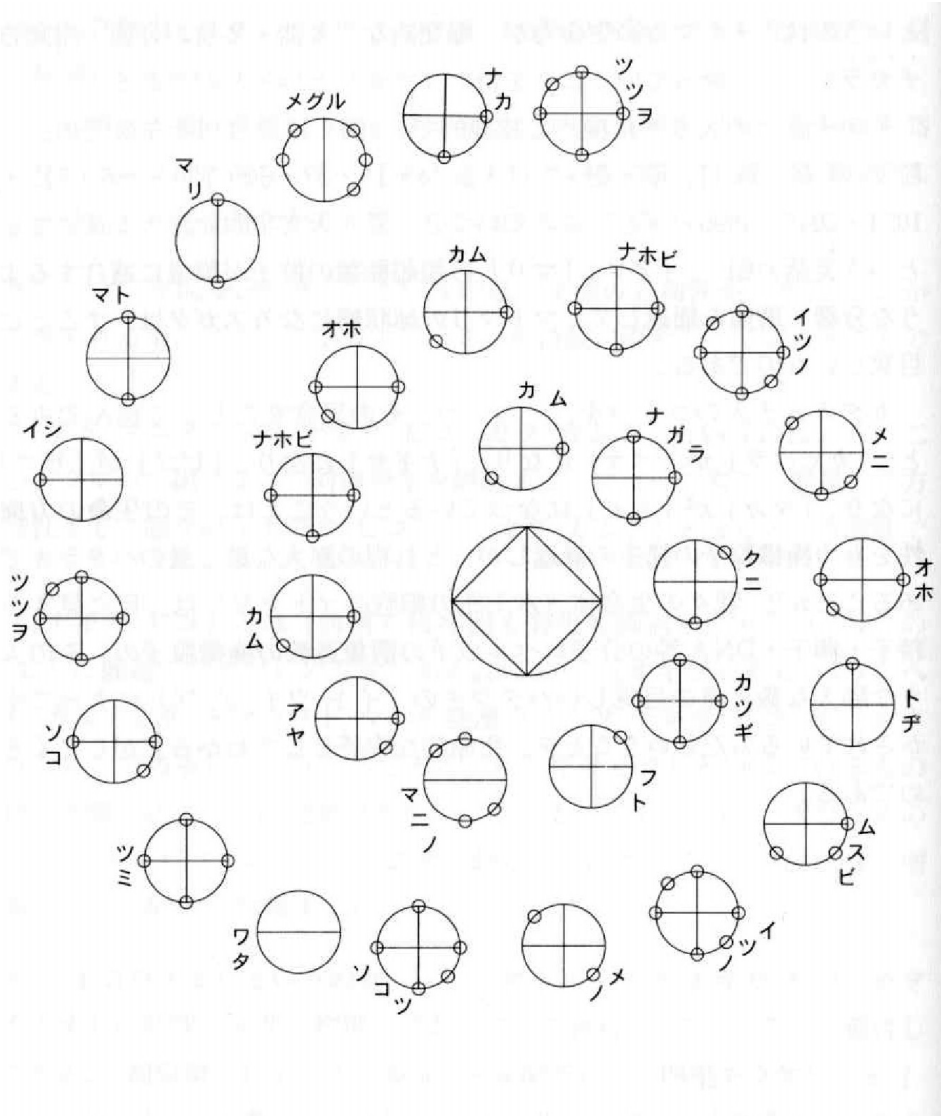
第四十六首



カムナガラ
クニカツギ
フトマニノ
アヤカムナホビ
イツノメニ
オホトヂムスビ
イツノメノ
ソコツワタツミ
ソコツツヲ
イシマトマリメグル
ナカツツヲ

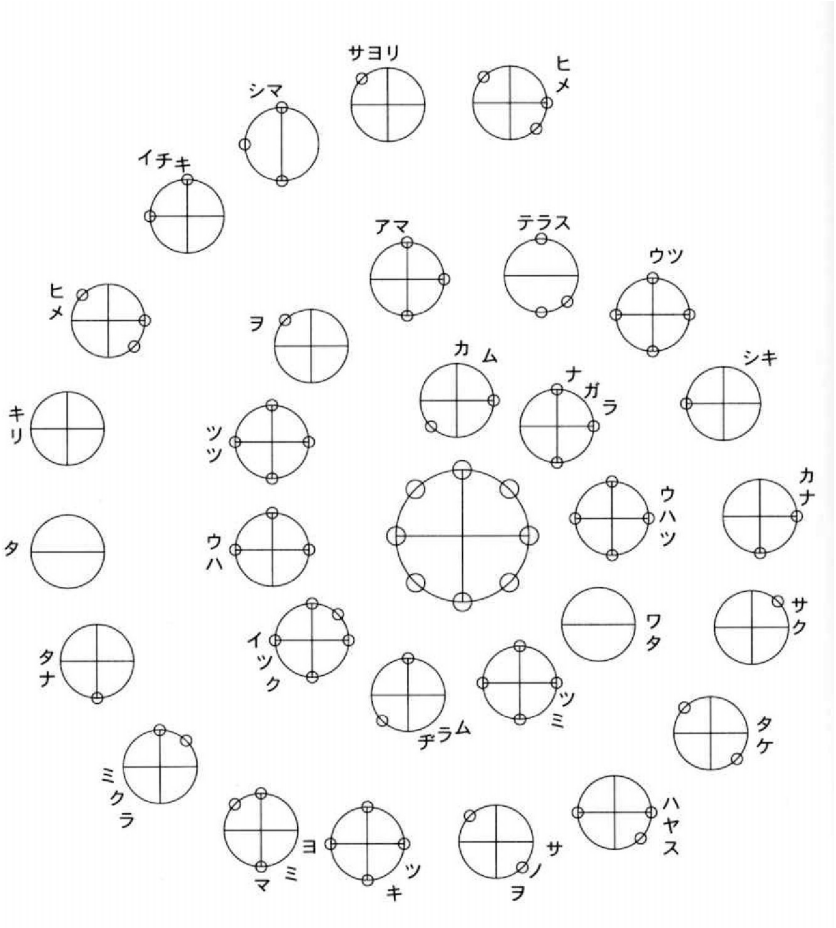
Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

・第四十六首解説

クニ（自由に定着されたもの）は「カ」がツ（個々粒子として）ギ（発生し）フトマニノ（二つのミの統合によって変遷したもの・潜象過渡状態）によって、アヤ（現象に出ながらアヤシイ雲や煙のようなハッキリしない状態）のカムのナホビ（何回も親和重合するカムのチカラが繰り返される、そのヒのチカラ）と、オホカム（六方環境の正反親和のカムのチカラ）のナホビによって「イ」（電気粒子の）ツ（個々に）ノ（変遷して）メ（発生し）ニ（定着されたものであり）オホ（六方環境の正反親和のカムのチカラ）トヂ（重合を持続する場ができること）ムスビ（六方環境・粒子化に進むチカラが繰り返し強く発生すること）を繰り返すことによって、イツノメノ（電子粒子の個々変遷して発生し定着することがイツノメニなので、それがさらに変遷してイツノメノとなる。）ソコツ（ソを繰り返す個々粒子）のワタツミ（ワからタしたツのミ・イツノメノまでを受けて、何段階もの粒子化の進行を示し、さらに解明して“ソコツワタツミ”と言い換えている。細胞レベルの粒子と考えられる。）の、ソコツツヲ（粒子化を繰り返す個々の四相性をもったもの・ソコツワタツミの四面性を持つ粒子ということは、細胞の粒子のソコワクをつくっている四面性をもったものという思念。）となり、イシ（イとして示されたもの、すなわち電気粒子として示されたもの）として、マトマリ（マに重合してマから分離したもの）メグル（発生して自由に存在する・旋転循環）ナカツツヲ（何回も「カ」がカカワって個々の四相性をもつもの）となるのである。

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

第四十七首



カムナガラ
ウハツワタツミ
ムラギイツク
ウハツツヲ
アマテラス
ウツシキカナ
サクタケハヤスサノヲ
ツキヨミマ
ミクラタナ
タキリヒメ
イチキシマ
サヨリヒメ

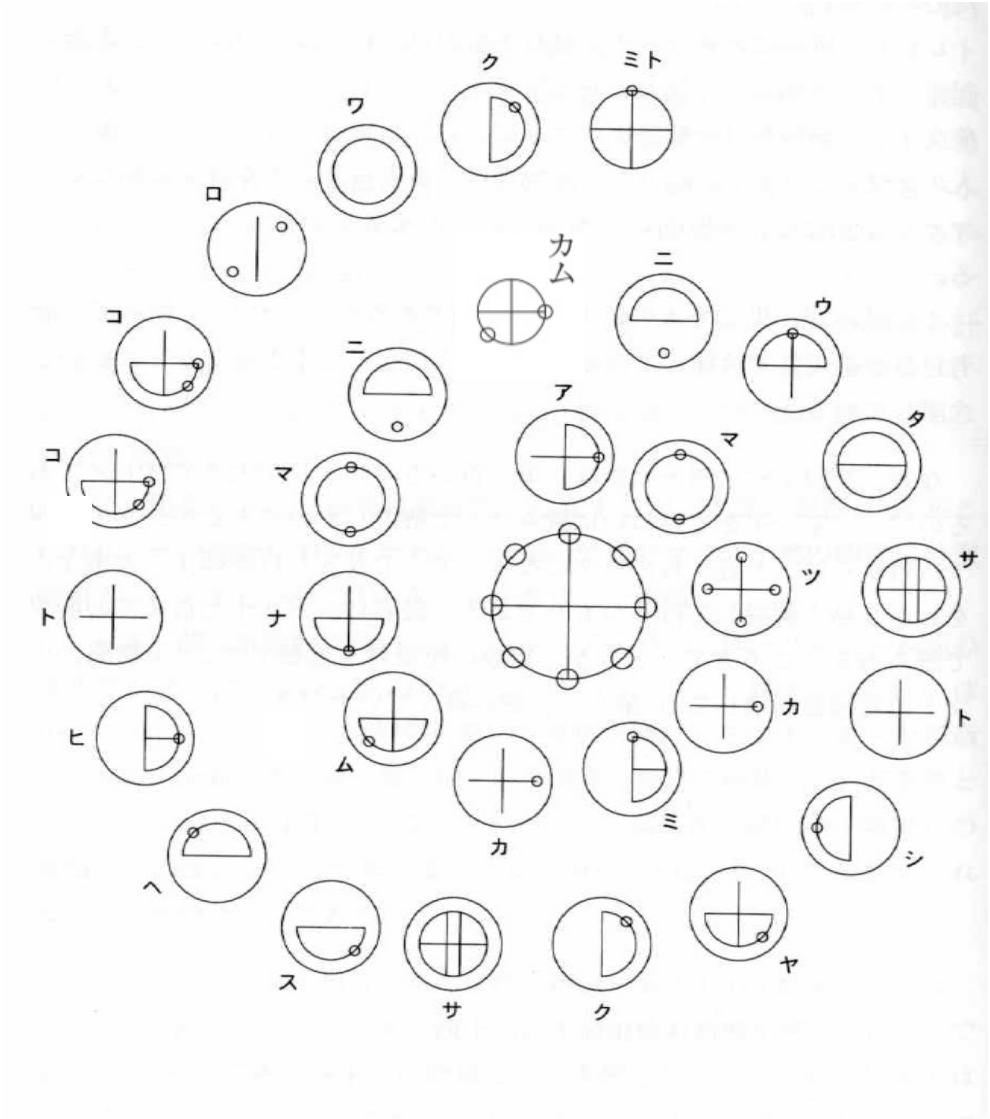
Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

・第四十七首解説

ウ（潜・現象の界面から）ハ（正反にでた）ツ（個々の粒子の）ワタツミ（ワからタしたツのミ・細胞レベルのマトマリ・そのワタツミを生かし働かせている潜象のチカラも含む＝全身の器官の形をつくるチカラ）はムラヂ（六方立体・粒子化のチカラがあらわれてその場が持続されること）のイツ（電気粒子）がク（自由に）ウ（界面から）ハ（正反に）ツツヲ（個々の四相をもつものとなった粒子）である。それはアマのテラス（チカラが正反にあらわれて進行する）であり、ウ（潜象の界面）のツ（個々粒子として）にシキ（示されて発生した）されて「カ」がナ（何度も繰り返しカカワって）、サク（「カ」の量は自由である）のタケ（独立的に正反に分化し変遷する）のハヤス（正反に極限まで進行する）したサノヲ（「カの量が変遷して四相性をもつ）である。そのツ（個々粒子として）キ（発生したものは）ヨミのマ（ヨのミというのは、四面性のミ、すなわち、“ウハツツヲ”“サノヲ”の四面性をもつものを個々として発生させている、ということは、還元するチカラのことで、それをヨミ“黄泉”といったのである。そのチカラがある場所をヨミマといった。それが後にあの世だったり黄泉の国だったりのコトバになっていったと考えられる。）のミクラ（ミの自由なあらわれ）のタナ（独立的に発生することが何兆回も繰り返される）であり、タキ（独立して発生し）リ（分離する）チカラをヒメている。イ（生命の最小単位の電子粒子）チキ（イが持続して発生する）がシマ（示されるマ）。サヨリ（カのサによって四相をもって分離するチカラを発生する）をヒメているのである。（イチキシマのサヨリにヒメられている）

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

第四十八首



アマツカミ
カムナマニマニ
ウタサトシ
ヤクサスヘヒト
ココロワクミト

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

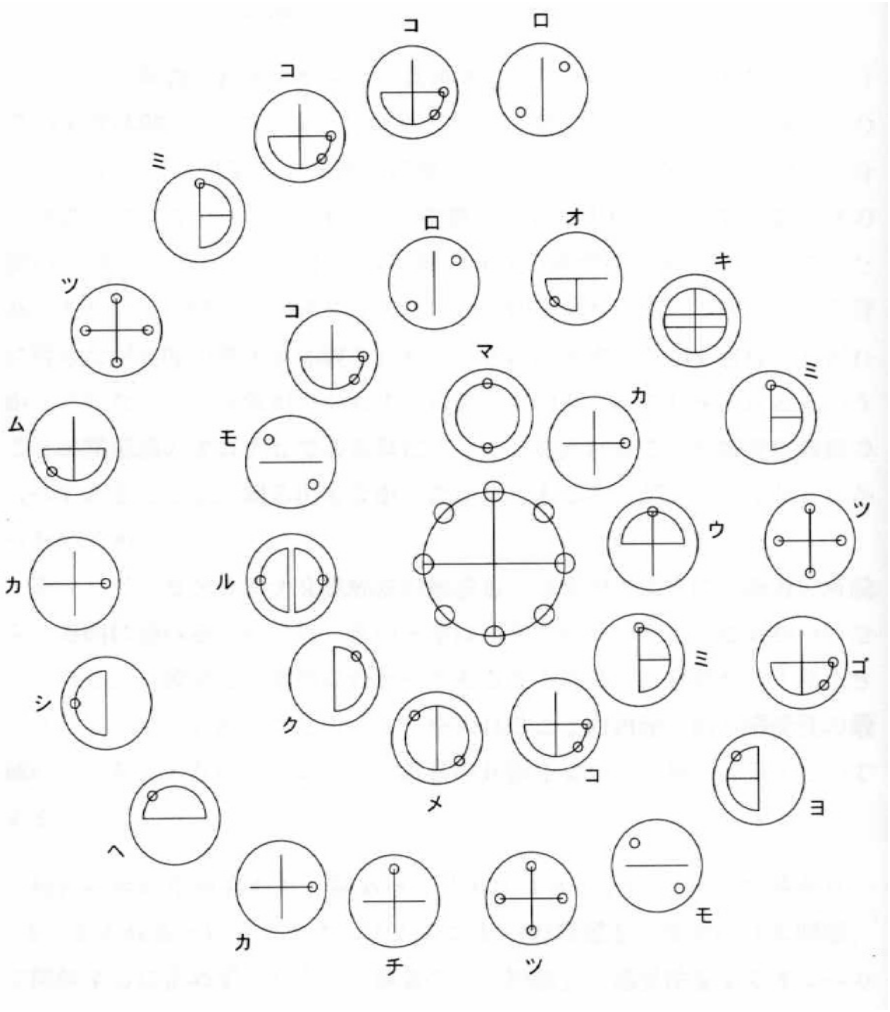
・第四十八首解説

４７首までの図象符ばかりのウタヒと違い、なんとなく日本語で感じることができるウタヒになっている。例えば、漢字を当てはめて、「天津神　神名真二真二　歌愉し　八草術べ人　心湧く水戸」と書いてもなんとなくわかった氣になる。カタカムナ文献のコトバの多くが古事記や「神名前比備軌」「神名真之術示」などの古文書に記されている。祝詞などにも使われているのは明らかである。
カタカムナ文献が楢崎氏たち相似象学会によって読み解かれ、今、世の中にでてきたのには、太古の叡智を思い出しさらに現在の人間脳との統合で、持っている高度の能力を開発し、二元の和合で新しい時代を築くためだと思われる。
アマのツ（個々である我々の生命の実質）は、カのミ（潜象過渡粒子）であり（＝アマナのミとカムナのミの統合でわたしたちはできていること）カは本来潜象でナ（何回も何回も）マ（現象の）ニ（方向に）マ（現象の）ニ（方向に）と、ウ（潜象界面から）タ（独立的に出て）サ（カの量なりの）ト（重合の現象物としてシ（示されたものである。）そしてその「カミ」はヤ（極限まで）ク（自由に分けられた）サ（カの量なりに）ス（進行する）ヘ（方向性をもつ）ヒト（カムのミをヒトツに統合したヒト＝カタカムナでは現象界の全ての生物を指す）のコ（繰り返し）コ（繰り返し）正反にあらわれるココロ（繰り返し繰り返し六方環境のオクから正反にあらわれる微粒子）のワク（発現する）ミト（カムのミの重合のミナモトである。ミトだけが図象になっているのはそれが重要なコトバだというあらわれ。）

マニ：現象物に定着されることを示している

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

第四十九首



マカウミコ
メクルモコロ
オキミツゴ
ヨモツチカヘシ
カムツミココロ

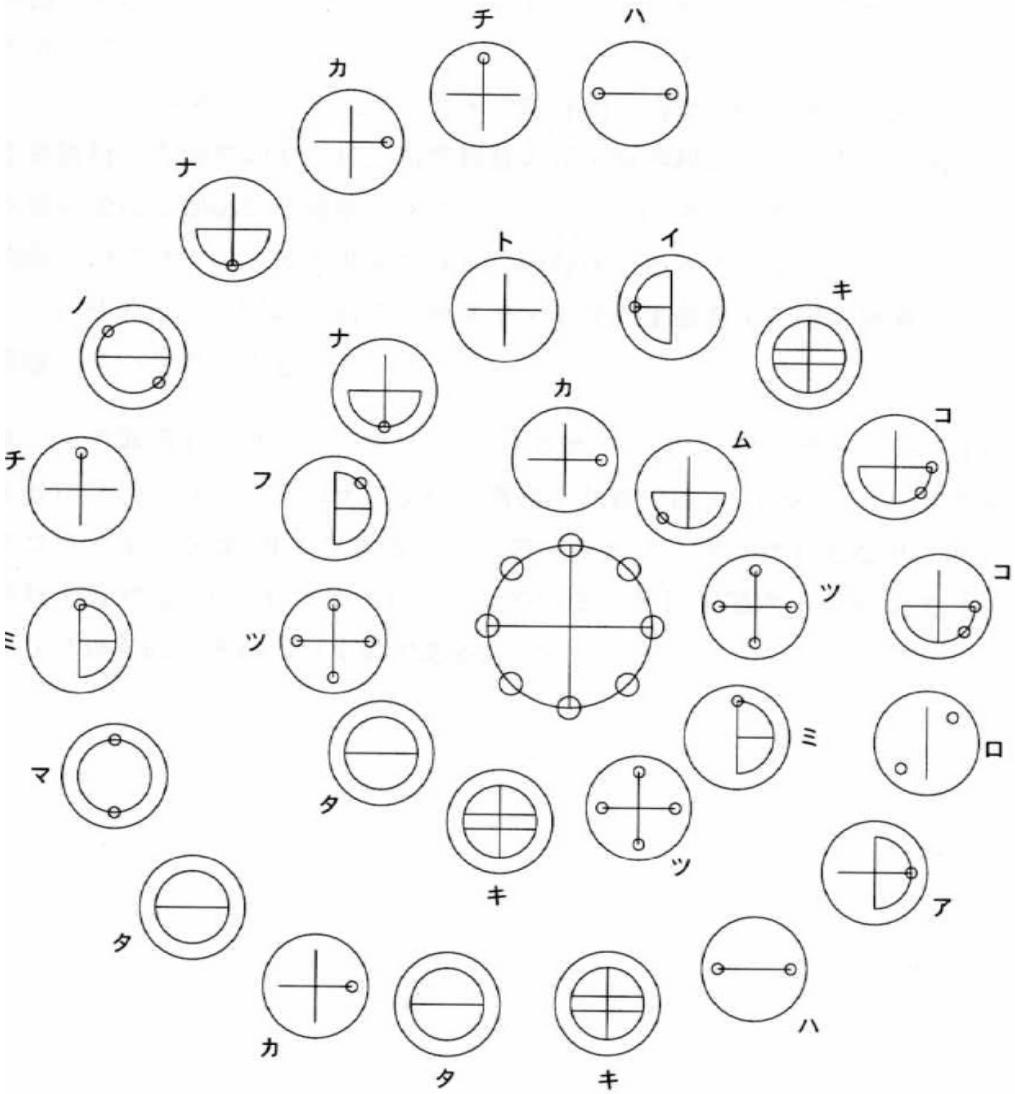
Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

・第四十九首解説

「アマツカミ　カムナマニマニ　ウタサトシ」（４８首）によって「マカ」（アマにあらわれているカムのチカラ）からウまれたミコ（繰り返し）のコロ（微粒子）はメクルモロコ（自転して循環していくカムから繰り返し変遷しオクから正反にあらわれるもの）のオキミツゴ（六方環境から発生したミの個々の繰り返しの粒子）であり、ヨモツ（四相をもって正反に発生しヤまで変遷する個々の粒子・収縮性・粒子化のチカラ）してはチカヘシ（持続的にカのチカラが方向性・拡散還元のチカラをもって示される・生命というものは一回発生しただけでは「イノチ」ではない。粒子化のチカラ（ヨモツ）と拡散還元のチカラ（カヘシ）が何兆回も繰り返されてイノチが持続される。）しているカムツミ（カムのミが個々にあらわれた）のココロ（潜象から繰り返し繰り返しあらわれる粒子）である。粒子の発生はヨモツ（発生）とカヘシ（還元）のチカラがあって初めてイノチが持続されるということ。

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

第五十首



カムツミ
ツキタツフナト
イキココロ
アハキタカタマ
ミチノナカチハ

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.

・第五十首解説

アマツカミ（48首）のマカウミコ（49首）のカム（潜象のカ）ツミ（微粒子）はツ（個々粒子として）キ（発生し）タ（独立的にでた）ツ（粒子の）フ（二つの）ナ（繰り返しの）ト（重合によって）イキココロ（生命発生粒子となり・イは生命を構成する最小単位で、イの持続が「イノチ」）ア（現象界の）ハ（正反として）キ（発生した）タ（独立的に出た）カ（タカミムスヒのカ）のタマ（現象界に出た現象のタマ）のミのチ（持続の）ナ（繰り返しの）「カ」のチカラをチ（持続する）ハ（正反にでるチカラとなるのである）

「ツキ」とはツとしてキすること、すなわち、現象の行動に出て正反にあらわれるチカラ。このチカラは繰り返し統合すること（フナト）で、突き、衝き、付き、着きなどの行動となるわけである。例えば、突きのチカラは突く、押し出すチカラと反対側から押し返すチカラを同時に発生するものであり、発生系のチカラと還元系のチカラのフトマニの物理を示すコトバでもある。

「タマ」とは「タ」した「マ」であり、「マカ」から現象にでたものは全て（天体も生物も鉱物も）タマである。

「ミチ」とはミの持続の思念であり、そのものの存在が続くコトになるから、のちに「道路」の意味に繋がっている。茶道、華道、書道、剣道、柔道、武士道などの精神的な「ミチ」にも繋がっている。

「ナカチハ」とは、生命の発生にも「カ」のカカワリ、すなわち「フトマニ」の発生が何兆回も繰り返されるので、その正反の発生の場を「ミチノナカチハ」というわけである。

Copyright © 2020 Keiko Adachi All Rights Reserved.